（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　中野　眞

ヘーゲルが、正規の著作として自ら公刊した書籍は三篇に限られるが、それら最重要書のうち、分量的に最大であり、また、内容的に最も難解である著作が、『論理学（Wissenschaft der Logik』（いわゆる『大論理学』）である。その一つの核心部分が、「反省（Reflexion）」、「矛盾（Widerspruch）」といった重要概念の登場する、第 2 部（『本質論』）冒頭部分であり、本博士論文は、この箇所の解釈に正面から取り組む。その際には、これまでの主要な研究文献が丁寧に参照され、また、それが批判的に検討されることによって、独自の解釈が打ち出されようとする。

全体は二部構成で、第一部は「反省論理の基本構造」、第二部は「反省規定論」と題される。第一部のテーマは、当該箇所の主題である「本質」を、さらには、「本質」そのものである「反省」の運動なるものを、ヘーゲルが根本的にどう了解しようとしているのかである。その論議によれば、「本質」とは、ヘーゲルにおいては、ある事物のうちにそれ自体として存している不動の内実なのではない。そうではなく、それ（「本質」）は、事物の一定の「内容」（「存在する諸規定」）として自己を実現するというあり方において成立する。しかも、この事物のあり方（「本質と内容との同等性」）は、既成の本質の見方に依拠せずに確立し主張される、主体の自立性の立脚点なのである。この立脚点の生成の過程こそが、また、「反省」の運動にほかならない。この運動は、ヘーゲルによって、「否定」の「自己への関係」と定式化されるのだが、本論文によれば、この「否定」とは、思考主体としての「自己」の思考過程そのものであり、それによって、この主体の「自立性」が確立されるのである。

第二部のテーマは、こうした「自立性」が、動的に確保される際に成立する「本質」の根本規定（「反省規定」）、すなわち、「同一性」「区別」「差異性」「対立」「矛盾」という重要諸概念の意味の確定である。本論文によれば、これら諸概念のうちで、まずもって重要なのは「差異性」である。その独自の解釈によれば、この「差異性」とは、かの「本質と内容との同等性」の成立を認める「同等性」の反省と、その成立を認めない「不等性」の反省との並立という事態である。それゆえにまた、「差異性」は、不可避的に「対立」へと、さらに、同一の本質に関する「対立」という「矛盾」へと展開するのである。

本論文は、プラグマティックな観点がやや強すぎる傾向が否定できないが、しかし、これまでの主要研究を踏まえつつ、一貫した独自の視座のもとで、難解なヘーゲル本質論冒頭の論議を揺らぐことなく解釈しぬいているという点で、ヘーゲル『論理学』研究に一石を投じうるものである。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判定する。